

アイアランドに関する地理学的研究史の素描

松川七郎

近代における経済学および統計学の発達、その一面において、いわゆる「地理上の発見」以降における地理学(とりわけ商業地理学)のそれとふかくむすびついているということは一般にみとめられている。このことは、W. Petty における経済学や統計的方法の成立についてもまた妥当するのであって、かれの経済学上の主著『アイアランドの政治的解剖』が、一方では人文地理学の先駆として、また他方では統計学のそれとして、それぞれに評価されているという事実がこれを物語っているといえよう。筆者の理解にしたがい、こういう評価をこのかぎりではいいかえれば、Petty における経済学の成立は、地理学的統計的方法のうゑに達成されたということになるが、かれのこのような方法の有力な社会的根拠の1つが市民革命=共和国時代のアイアランドにおける Cromwell の収奪=植民——それを遂行するために Petty が主宰した土地測量や没収地分配に関する諸事業——であることは疑いない。この点について、筆者はすでに私見を述べたが、ここでは、研究のもう1歩前進のために、かれが主宰したこれらの事業の歴史的背景の1つとしての、かれ以前の時代におけるアイアランドに関する土地測量=製図術(cartography)や地誌(chorography)、総じて地理学的研究と考えられるものの発達史を素描しておきたい、と思う。

I

アイアランドは、Ptolemaios Klaudios(fl. 127-57)の昔から数多くの地図のうゑにその姿をあらわしていたけれども¹⁾、テューダー王朝の後半以前のイングランドにとっては、至近の距離にありながら、遠い北アメリカの新植民地ヴァージニアと同じ程度の野蛮な異国としてしか考えられていなかった、という²⁾。ところが、この時期をさかいに、アイアランドに対するイングランドの知的関心はにわかになかまったのであって、そのことは、1570年代以降、この島国についての地誌的記述や地図類が、「前代未聞」といわれるほどの数にのぼっていることから知られる³⁾。この事実が、テューダー王朝の開幕以来、とりわけ Elizabeth 女王の治世以来積極化し、宗教改革を直接の口実とするところの、新教国絶対主義

イングランドによる旧教国アイアランドの収奪=植民にともなって急速にもたらされたものであることは疑いない⁴⁾。いいかえれば、一方では収奪に対するアイアランド人の反乱を鎮定するための軍事行動の必要からうながされる軍用地図の作製への要請と、他方では植民のための地誌的知識ならびに精密な地図(estate map)の作製への要請との双方がむすびついてこの事態を生みだしたのである⁵⁾。

1) アイアランドに関する地図の発達は、古代から近世初期にいたるまで、ヨーロッパ諸国に関するそれと歩調をあわせている、と考えてさしつかえなからう。すなわち、1) 古代 Ptolemaios の時代、2) 中世における世界図(Mappae Mundi)の時代、3) 14~16世紀における海図の時代、4) 16世紀における手書図および印刷図の時代、5) 16~17世紀における製図術の革新から Petty までの時代(1570-1680年)、がそれである。Cf. M. C. Andrews, *The map of Ireland, A. D. 1300-1700*. Belfast, 1923, p. 5. アイアランドは、これらのすべての時代の地図や海図にその姿をあらわしている。そして、地図作製者の関心が一般に実測にもとづく内陸地図の作製にむかいはじめたのが16世紀以降で、G. Mercator(1512-94)と不可分にむすびつく A. Ortelius(1527-98)の不朽の業績『世界図』(*Theatrum Orbis Terrarum*)の公刊された1570年が、製図術における中世と近世とをわかつ分水嶺といわれているのはきわめて興味ふかい。Andrews, *op. cit.*, pp. 8-9, 19-23. というのは、この時期は、アイアランドについての地理学的関心がいちじるしくたかまりはじめたまさにその時期であるからである。

2) E. G. R. Taylor, *Later Tudor and Early Stuart geography, 1583-1650*. London, 1934, p. 42.

3) *Ibid.*, p. 42.

4) *Ibid.*, pp. 42-43.

5) R. V. Tooley, *Maps and map-makers*. London, 1935, p. 92. Taylor, *op. cit.*, pp. 42-43. Y. M. Goblet, *La transformation de la géographie politique de l'Irlande au XVII^e siècle dans les cartes et essais anthropogéographiques de Sir William Petty*. 2 vols. Paris, 1930. Vol. I, p. 134. 「Henry VIII から William III までのアイアランドの地図は、主として征服と収奪の必要から生れた」といわれているのもこのためである。J. Andrews, *Ireland in maps*. Dublin, 1961. p. 11.

ところで、これらの地誌的記述や地図類がイングランド人の業績であることはいうまでもないが、この時期のイングランドにおける土地測量=製図術の状態はどうかといえ、Henry VIIIの治下における宗教改革を直接の契機としつつ、すでに急速な発達をとげつつあった⁶⁾。というのは、この改革にともなう修道院の解散は、土地所有の大規模な変革をもたらし、新興の土地所有者を生みだしていたのであるが、かれらはみずからの私有財産権(土地所有権)の限界を画定するために、所有地の精密な測量とそれにもとづく地図を必要としたからである⁷⁾。イングランドにおける土地測量が1個の職業として独立するのもこの過程においてであって⁸⁾、Elizabeth女王の即位後10年とはたたぬうちに、絶対主義国家の側からの統治上の要請にもささえられながら⁹⁾、測量や、海図および地図の作製やについての幾何学的諸方法はいちおう確立し、また測量器具について見ても、羅針儀や測鎖のほかに、素朴な経緯儀や平板(plane-table)がこの時期から使用されるようになったのである¹⁰⁾。中世以降、海図や航路図(portlano)を主軸として発達したところの、いわば外側からの地図と、内陸の実測にもとづく地域図を主軸として発達したところの、いわば内側からの地図との総合が開始されたのは、すくなくともイングランドに関するかぎり、Elizabeth女王の治下における絶対主義の最盛期と考えてさてつかえなからう¹¹⁾。いずれにせ

6) イングランドにおける近代的土地測量に関する最初の著作は、Sir A. Fitzherbert(1470-1538)の *Boke of surveying*, etc. London, 1523 だといわれているが、幾何学的土地測量術に関する最初の著作は、R. Benese(fl. 1537-47)の *This boke sheweth the maner of measuryng of all maner of lande*, etc. London, 1537? であるという。G. E. Fussell, *The old English farming books from Fitzherbert to Tull, 1523 to 1730*. London, 1947, pp. 5-7. E. G. R. Taylor, *The mathematical practitioners of Tudor & Stuart England*. Cambridge, 1954, pp. 14, 312. この書物は、修道院の解散の直前に修道院のなかから生れた。Taylor, *Mathematical practitioners.*, p. 168.

7) E. Lynam, *British maps and map-makers*. London, 1947, p. 14. G. N. Clark, *Science and social welfare in the age of Newton*. Oxford, 1949, pp. 125-26.

8) Lynam, *op. cit.*, p. 14.

9) 軍事上および民政上の目的から地図の価値を高く評価した最初の近代政治家は、イングランドでは、Elizabeth女王治下の宰相 W. Cecil(1520-98) であるといわれている。Taylor, *Mathematical practitioners.*, p. 177.

10) *Ibid.*, pp. 31, 58. Lynam, *op. cit.*, p. 18.

よ、大規模な反乱が相ついだのと表裏しつつ、本格的な植民が開始された16世紀後半以降のアイアランドは、「イングランドの測量家や製図家たちにとっての演習地」¹²⁾にほかならなかつたのである。

II

初期ステュアート王朝の治世40年間のアイアランドは、表面的に見るかぎり、反乱というほどの反乱もない「平和な」時代であったが、同時にそれは、アルスタ植民(Plantation of Ulster)をはじめとするいっそう大規模な植民にあけくれた時代であった¹³⁾。この時代のイングランドにおける測量=製図術の状態はどうかといえ、W. Gilbert(1540-1603)の磁気学についての決定的な大著¹⁴⁾『磁石について』(*De Magnete*, etc. London, 1600)の公刊とほぼ同じころ、J. Godwyn(fl. 1597-1600)によって地平角測度器(circumferentor)が発明され、それにつづいて、J. Speed(1552?-1629)の不朽の業績、すなわち『大ブリテン全図』(*The Theatre of the Empire of Great Britain*. London, 1610-11)の公刊があり、さらに1616年には、「幾何学的測量の実際をはじめて全面的にとりあつた論著」といわれている A. Rathborne, 1572-1618)の『測量者』(*The Surveyor*, etc. London, 1616)が公刊され、この技術の発達が促進された¹⁵⁾。ところが、このような状態を基礎としつつ、新植民地アイアランドはくりかえし測量されたにもかかわらず¹⁶⁾、この時代のアイアランド植民、とりわけアルスタ植民の失敗の1因が不正確な測量に帰せられていることから知られるように、この技術そのものの水準はけつしてたかいものではなかつた¹⁷⁾。土地の測量といえ、現在では

11) Cf. Andrews, *Map of Ireland*, pp. 8-9, 19-23.

12) Taylor, *Mathematical practitioners.*, p. 31.

13) しかしながら、この「平和な」時代は、実は過去約5世紀にわたるイングランドの収奪によって、この島国に累積された諸矛盾が急速に激化した時代であり、そしてこれらの矛盾は、イングランド本国における絶対主義末期の諸矛盾とからみあいながら、1641年の大反乱となって爆発するのである。

14) Taylor, *Mathematical practitioners.*, p. 49.

15) *Ibid.*, pp. 51, 59, 191, 194, 343.

16) R. Bagwell, *Ireland under the Stuarts and during the Interregnum*. 3 vols. London, 1909. Vol. I, pp. 74-75, 84-86. M. J. Bonn, *Die englische Kolonisation in Irland*. 2 Bde. Stuttgart und Berlin, 1906. I. Bd. SS. 316 18, 355, 363. H. F. Kearney, *Strafford in Ireland, 1633-41. A study in absolutism*. Manchester, 1959, p. 98.

17) Bonn, *op. cit.*, SS. 317-18. J. C. Beckett, *A short history of Ireland*. London, 1952, pp. 59-60. E. Curtis, *A history of Ireland*. London, 1950, p. 238.

実測にもとづく地図の作製と不可分にむすびつく概念であるが、この当時は必ずしもそうではなく、同時に土地面積の推定的な記述、地価の評価、土地に関する裁判の判決、等々、総じて土地に関する調査一般をも意味していたのであって、この事実もまた、この技術の水準のひくさを側面的に示すものといえよう¹⁸⁾。

その反面において、植民にあけくれたこの時代は、前時代にもましてアイアランドに関する諸知識が要求された時代であって、これにうながされながら、この島国は地誌的研究の対象となり、17世紀イングランドにおける地理学の発達史上いわゆる「地誌の段階(1600-40年)」がもたらされるのである¹⁹⁾。そして、1641年の大反乱勃発までに公刊された地誌的研究の成果はかなりの数にのぼっている²⁰⁾。とはいえ、これらの記述家たちは、総じてアイアランドには親しみのうすい「異国人」というべき人々なのであって、かれらの観察や記述の方法は、表面的で雑然としており、在来の諸成果をぬきこんでるほどのものはあらわれなかったのである²¹⁾。

III

テューダー王朝の後半から初期ステュアート王朝の時代については以上のとおりであるが、そのかぎりにおいて、つぎの2点はとりわけ注意すべきであろう。すなわち、その第1は、一般的な問題であるが、土地測量=製図術の発達が社会経済現象の数量的(統計的)観察方法のそれと密接にむすびついていた、という点である。というわけは、土地測量=製図も統計的観察も、測定および計算を基礎とする諸現象の数量的な表示という点において、方法的にきわめて緊密な親近性をもっているからであって、上述のような経過をたどって発達した16世紀後半以降の地図(estate map)が、しばしばその1隅に当該地域の保有者別土地面積、家畜頭数、等々を数量的に示した一覧表をかかげているのは、両者の親近性を如実にあらわすものにほかならない²²⁾。James I 治下の測量

家で、土地の価値やその生産性の測定に重点をおいた人²³⁾として注目すべき W. Folkingham (fl. 1609-10) が、自著『測量法大要』(*Fevdigraphia. The Synopsis or Epitome of Surveying Methodized*, etc. London, 1610)の冒頭において、「天秤は公平な裁判官である」(*Balanx est arbiter aequus*)という標語をかかげながら、「もし読者諸君が数・重量・尺度(Number, Weight, Measure)を放棄してしまうならば、諸君は正義を追放し、昔ながらの、あのいまわしくも救いがたい混乱を地獄からよびよせて再現することになる」²⁴⁾といているのも、両者の関連を集約的に強調するものといえよう。

つぎに、その第2は、特殊な問題であるが、テューダー王朝後半以降のアイアランドにおける土地測量が、その目的から見るばあい、いずれも地形測量(topographical survey)であると同時に地籍測量(cadastral survey)でもあるという性質を多かれすくなかれもつようになった、という点である。いいかえれば、これらの測量がいずれも収奪地の分与=植民のための基礎調査としておこなわれたものであることはいうまでもないが、新植民地は貨幣地代その他の形態におけるもろもろの収入を生むべきものなのであるから、これらの測量は、土地の面積や形状ばかりではなく、その種類、価値、等々、総じてその良否(profitable or unprofitable)をも調査測定しつつ、近代的土地所有権の限界を画定しなければならない。上述したアルスタ植民の失敗の1因としての不正確な土地測量は、実はこの2重の性質をもつ測量の困難性に胚胎していたとってさしつかえないのである²⁵⁾。Folkinghamの上述の著作が「アイアランドまたはヴァージニアの植民地におけるすべての植民請負人のために」²⁶⁾と銘うって公刊されたのも、この困難性の克服と

23) Taylor *Mathematical practitioners.*, p. 340.

24) W. Folkingham, *Fevdigraphia*. The epistle to the reader. Folkinghamの経歴について筆者はほとんど知らないが、この著作そのものは、当時は相当重要視されたものらしい。S. J. Madge, *The Domesday of crown lands*. London, 1938, pp. 151, 301.

25) 前出の注 17) の諸文献参照。この困難性が、この時代にいたるまでゲールの氏族制共同社会の慣習が根強く温存されていたアイアランド社会の諸事情——土地保有関係の不明確性、土地面積の計測単位の不統一性、等々——にも起因していたであろうことはいうまでもなからう。 *Advertisements for Ireland, being a description of the state of Ireland in the reign of James I*, ed. by G. O'Brien. Dublin, 1923, pp. 20-21. Bonn, *op. cit.*, SS. 317-18.

26) Folkingham, *op. cit.*, Title page.

18) Andrews, *Map of Ireland.*, p. 29.

19) F. V. Emery, *Irish geography in the seventeenth century*, pp. 263-64. (*Irish Geography*. Vol. VIII, No. 5. Dublin, 1958.) Goblet, *op. cit.*, pp. 133-41.

20) Emery, *op. cit.*, pp. 263-64.

21) *Ibid.*, p. 264. Gobletは、16世紀後半の Elizabeth 女王時代のたいへんな植民地熱をもってしても、Cambrensis, Giraldus de Barri (1146?-1220?)のあの古い *Topographia* にかわるべきアイアランドの記述的地理学は生れなかったといているが、このことは、初期ステュアート王朝の40年間についてもあてはまるであろう。 Cf. Goblet, *op. cit.*, p. 140.

22) Clark, *op. cit.*, p. 126.

いう社会的な要請にこたえようとしたものといわなければならない。

IV

「土地資産の没収時代」²⁷⁾ともいわれる市民革命の時代のイングランドにおいては、きわめて数多くの土地測量がおこなわれ²⁸⁾、土地測量=製図術もまた長足の進歩をとげたのであって、W. Leybourne(1626-1716)の名著『測量全書』(*The Compleat Surveyor*. London, 1653)はその1つの頂点を示すものといえよう²⁹⁾。その反面、この時代のアイアランドはどうかといえば、1641-52年の大反乱と Cromwell による収奪=植民の時代、アイアランド人の所有地がこの島国の総面積の7.7%(大反乱直前には54.6%)に激減した時代であった³⁰⁾。そしてこの時代には、アイアランドに対するイングランド人の関心がいちじるしくたかまり、地誌的研究がおこなわれると同時に、収奪地の分与=植民のための基礎調査としての土地測量もまたおこなわれたのであって、前者を代表するものとしては G. Boate(1604-50)の『アイアランドの自然誌』(*Ireland's Natural History*, etc. London, 1652)が、また後者を代表するものとしては Petty の土地測量(Down Survey)があげられ、この時代は Boate-Petty の時代として特徴づけられているのである³¹⁾。

この時代の収奪が全島的なものであったのと表裏して、Boate や Petty の調査研究もまた全島的なものになった。そして、この点だけに着眼すれば、それは調査地域や研究対象の拡大という点だけで従来と異なるにすぎな

27) Taylor, *Mathematical practitioners.*, p. 84.

28) Cf. Madge, *op. cit.*, Pt. III.

29) Taylor, *Mathematical practitioners.*, pp. 84-87.

30) W. F. T. Butler, *Confiscation in Irish history*. London, 1917, pp. 235-36.

31) Emery, *op. cit.*, p. 263. Emery は、17世紀アイアランドに関する地理学の発展をつぎの3期に分けている。すなわち、1)「伝統的な、型にはまった地誌的研究の時期(1600-40年)」、2)「内乱と Cromwell の収奪=植民とによって変化が生じ、精密な測量調査が数多くおこなわれ、とりわけ Boate や Petty の研究成果がでた時期(1640-72年)」、3)「これらの新研究の影響が、M. Pitt(*fl.* 1654-96)の地図(*The English Atlas*. 4 vols. London, 1680-83)や、Molyneux 兄弟、

しかしながら、この時代の征服者が、もはや絶対主義国家ではなくてイングランド共和国であったこと、またここでの土地分配が、その政府の純然たる貨幣債務の償還としておこなわれたこと、さらにこの分配をつうじて新たに設定されるべき土地保有関係が、いちじるしく近代化されたものであったこと、すくなくともこれらの点は、この時代におこなわれた調査研究の新しい条件であった。その反面、調査研究の主体としての Boate と Petty に共通するものは、国籍こそちがうけれども³²⁾、ともに新興市民であり、医学の研究者であり、Bacon の学徒であって、当時の科学主義運動の担い手であったという点である。しかも、テューダー王朝の後半以降における土地測量=製図術の発達に関連して指摘した上述の特徴や問題は、この時代についてもまた指摘しうるのである。Petty がそれをどのように発展させ、また Boate が表面的で雑然としていた従来の地誌的研究をどのように深化させ体系づけたかがつぎの問題であることはいうまでもなからう。そして、以上に述べたかぎりにおいてさきばしっていうならば、在来的な地誌的研究を Bacon の科学思想の線にそって体系づけたのが Boate の上記の業績であり、またこの思想を基調の1つとしながら、Folkingham が強調した「数・重量・尺度」による方法を最大限に活用し、従来の土地測量における上述の難問題を解いたのが Petty の地代論や地価論にほかならなかったのである。

すなわち W. M.(1656-98), Sir T. M(1661-1733)の自然誌研究によってその頂点に達した時期(17世紀の第4の4半期)」、がそれである。そしてこのばあい、Emery が第2期のおわりを1672年としているのは、Petty の『アイアランドの政治的解剖』がこの年に完稿されたと考えてのことである。Emery, *op. cit.*, pp. 263, 268.

32) G. Boate はオランダに生れ、ライデン大学で医学を学び、1628年に、そこで学位をとったのであるが、その後ロンドンに來住した。かれの兄もライデン大学出身の医学博士で、1636年ごろからダブリンに定住し、大反乱勃発当時はイングランド軍の軍医監であった。Boate の著作は、かれの兄の長年の見聞に負うところが多いという。 *Dictionary of National Biography* (A. & G. Boate).